

Costume and Textile

No. 1

服飾文化学会会報

2001年2月



平成12年度 事業報告



会長あいさつ

石山 彰

新世紀の到来を心からお慶び申し上げます。学会役員ならびに会員の皆さまの並々ならぬご協力のお陰によりまして、学会も順調に運営しており、この3月には修士論文、卒業論文の論文発表会を、また5月には学会誌の創刊の運びとなり、目下鋭意編集も進行中です。会員の皆さまのますますのご健勝とご発展を祈ります。

第1回論文発表会を終えて

服飾文化学会では、平成12年3月4日（土）、大妻女子大学に於いて、論文発表会が盛会に開催

されました。本学会の第1回目の事業が、未来を担う若い研究者の成果発表であったことは、大変

意義深いことでした。

論文のテーマは学会の多面性をあらわして幅広く、内容も発表者の努力と、先生方のご懇篤なご指導による、充実したものでした。

〔卒業論文〕

男性のファンシー・ドレス

—19世紀の仮装衣装—

阿久津ヒロ子 (文化女子大学)

ジョルジュ・バルビエの挿絵本

「雅びなる宴」について

及川真由美 (共立女子大学)

閑院宮春仁王妃直子殿下着用の

大礼服用トレーン

萩野奈都子・笹井優子 (大妻女子大学)

シャルロット・ペリアン研究

國枝幸子 (杉野女子大学)

アイヌ衣服の特色

—他の極東民族服との比較から—

樺沢洋子 (日本女子大学)

アイヌの民族衣服

—北海道を囲む中国大陸・アムール地方・樺太・本州との関係—

諏訪原貴子 (和洋女子大学)

バレエの衣装の変化

—チュチュはどのようにして生まれたか—

珊瑚理菜 (実践女子大学)

〔修士論文〕

アーツ・アンド・クラフツ運動における

刺繍の系譜

鈴木あかね (共立女子大学家政学研究所)

終了後は、大妻女子大学アトリウムにおいて、和やかに懇親会が催されました。

(論文発表会担当 鷹司綸子)

第1回 総会・大会を終えて

服飾文化学会第1回総会・大会は2000年5月28、29日、2日間にわたって大妻女子大学で盛会に開催された。設立してから4ヶ月余であるにもかかわらず予想をうわまわる約150名の会員の出席をみる事ができた。研究発表15、ポスターセッション発表5、作品展示発表10など多数の発表があり、服飾文化学会への期待の大きさが感じられた。

総会は石山彰会長の挨拶ののち、事業報告、会計報告、事業計画などの承認を得、総会を終えた。総会後の特別講演は「新素材の造形性について」と題し、東レ株式会社 繊維マーケティング部 太田義一氏による講演で、日本が世界に誇る新素材、ハイテクを駆使した作品について、資料と実物作品の数々に手を触れながら21世紀の衣文化に目をみはった。講演後、18時よりアトリウムにて懇親会が行われた。大妻女子大学のオーケストラ有志による演奏を聞きながら、なごやかな雰囲気の中に包まれて会員相互の親睦を深めた。大会2日目は9時よりポスターセッションと展示発表によ

るショートスピーチ、質疑応答ののち研究発表を終えた。午後1時40分よりエクスカッションとして東京現代美術館で開催されている「三宅一生展」へ出発した。1枚の布という思想を根っこに自由な発想で新しい衣服をひらいたデザイン実験の公開展でもあり新しい世紀を迎えるにふさわしい展覧会であった。

(実行委員長 石井とめ子)

研究発表 第1部		
1	新素材へのアプローチ、一つの試み —新合繊素材の特性と加工—	伊藤 一郎 三石 幸夫
	聖徳大学短期大学部 聖徳大学	
2	紅花染めの発色について —アルカリおよび酸の影響—	藤居真理子 高橋 兆子
	東京家政学院大学	
3	スカートの種類と動作との関係	田中 百子 永井 房子 伊藤 順子
	相模女子大学短期大学部 相模女子大学 相模女子大学短期大学部	

4	被服教育の手法における一試案 ～フェルト製作実習を通して 札幌国際大学短期大学部	永田志津子
5	婦人既製服の初期発展期と流行 一日・米ブラウスの生産と消費を通してー 実践女子大学	鍛島 康子
6	宇宙服の変遷 東京家政学院大学大学院生	山元 通子
	東京家政学院大学	藤居真理子
7	メンズスーツの革新的デザイン ーイタリア未来派の画家たちー 文化女子大学	神部 晴子
8	ファッション・イラストレーター G. パルピエの 創作過程 ー挿絵本「雅なる宴」をとおしてー 共立女子大学	小沢 直子 伊藤 紀之

ポスターセッション ショートスピーチ・質疑応答		
1	草履の用と美に関する研究 大妻女子大学短期大学部	笹本 信子
2	煎茶染めについて 東京家政学院大学	榊原あゆみ 藤居真理子
3	大礼服用トレーンの修復 大妻女子大学	萩野奈都子 石井とめ子
4	ロココファッションからバレエ衣装「チュチュ」 への展開 京都女子大学大学院生	大澤香奈子 京都女子大学 常見美紀子
5	山車飾幕における刺繍表現と制作技法 ー半田市の祭礼飾幕を中心としてー 女子美術短期大学	岡田 宣世

研究発表 第2部		
9	グアテマラ先住民の服飾にみる文化変容 ー祭祀集団(コフラディア)の衣装からー 日本女子大学大学院生	本谷 裕子
10	「風通絣織教範」の風通絣織 山梨県立女子短期大学	石山 正泰
11	浮世絵にみられる文化・文政期の服飾文様につ いて 共立女子大学	伊佐 清花 伊藤 紀之
12	山丹服・蝦夷錦の文様(3) 昭和女子大学	村井不二子
13	中世公家の日常生活にみられる香り ー「実隆公記」からー 武蔵大学大学院生	本間 洋子
14	近世における坐法の変遷(従来物挿絵を記録図 版として) 群馬大学	本間 玲子
15	着付士資格労働省認定への展望と現況 全日本着付士職業訓練校	尾崎 弘子

展示発表 ショートスピーチ・質疑応答		
1	オホガンジーとフェルト制作によるタペストリー 相模女子大学短期大学部	池田 節子
2	帯地を使ったチャイナ・ドレス 東京家政学院大学短期大学部	井澤 尚子
3	19世紀の衣服装飾からイメージしたドレス 北海道浅井学園大学短期大学部	泉山 幸代
4	創作帯結び 家紋(1) 全日本着付士職業訓練校	石川圭井子
5	創作帯結び 家紋(2)	同上 岩井 信子
6	創作帯結び 家紋(3)	同上 杉山 妃子
7	創作帯結び 家紋(4)	同上 田中 和子
8	創作帯結び 家紋(5)	同上 渡辺 昭子
9	フェルティングを取り入れたニット作品の表現法 の研究 和洋女子大学短期大学部	多田 洋子
10	ハーダグンガー刺しゅうのテーブルクロス 和洋女子大学短期大学部	矢部 洋子

第1回 夏期セミナーを終えて

第1回夏期セミナーは8月7日(月)～9日(水)の3日間、埼玉県嵐山市のヌエック(国立婦人教育会館)で行われた。参加者39名。第1日は桜美林大学教授・渡辺くにえ氏「世界の染織と日本の染織」、小川和紙工業組合専務理事・久保晴夫氏「小

川和紙について」の講演があり、夜は懇親会が開かれた。

第2日目は午前「これからの服飾文化の研究」と題してシンポジウムが行われ、西洋服飾(史)研究の立場から石山彰氏、東洋服飾(史)研究の



観点から杉本正年氏、生活文化(史)研究の経験から徳永幾久氏(欠席により原稿代読)の基調講演があった。午後は埼玉県立歴史資料館民俗資料室長・山田実氏「埼玉の民俗芸能」、逸見織物社長・逸見敏氏「秩父銘仙のあゆみ」の講演2題が行わ

れた。夜は「秩父銘仙」「女性下着の歴史を検証」「福島県昭和村のからむし織」などのビデオ供覧があった。

3日目は31名の参加者でバス見学をし、埼玉県立歴史資料館、埼玉伝統工芸会館、「晴雲」酒蔵資料館、久保晴夫紙漉き工房、丸木美術館(原爆の絵)をまわった。講演はいずれも実物や資料を供覧したり、映像資料を用いたりして非常にわかり易く有意義な内容だった。見学会は小川町の料亭「二葉」で名物の「忠七めし」を味わい、伝統工芸会館や紙漉き体験をする人もいて楽しんでた。ただひとつ残念なのは、シンポジウムで討論の時間がなくなってしまったことである。

(夏期セミナー担当 蔵方宏昌)

夏期セミナーに参加して —染織の伝統と創造を模索して—

桜美林大学 渡辺くにえ

夏期セミナーでの話をすることになり、反省の良い機会であろうと、その報告を兼ねて書くこととなった。

私の立場は服飾意匠の研究室を卒業して、2年間ニットのデザインをした。ニットは素材、撚糸、色彩、編み地から形態まで服造りの発端から販売の最後まで全てに係わる仕事で、その後の立場にとって貴重な経験となった。また量産の商品として売れることはそこに潜む服装の本質である人間の社会性やファッションの関係などを体験することにもなった。

次に教師や学生を経て今の教育の場にいるが、その間の1977年家政学会民俗服飾研究委員会企画の民俗服飾オリエントの旅に出会った。これは一気に外へ目が向いた画期的な旅となった。イランやトルコの遊牧民族の中でターバンやドレパリーの壁の美しかったこと、羊の全てによって生かされる人と暮らしのエコロジカルなこと、カーペットやキリムの技が脈々と続いていた。この感動は忘れることはできない。

また中国の旅では長沙博物館で漢の錦や紗が

BC2世紀という伝統の古さと精巧さに驚いた。

アジアの旅では素材から染、織そして形態へと繋がり、民族は交流を以て、繋がっていることを実感する。例えばアジアの緋がインドのパトラに発し、インドネシア・バリのグリーンシン、タイ、カンボジア、フィリッピン、沖縄・奄美大島から久留米緋へと連続性と独自性を見ることができた。その後日本各地への伝播となり、藍染の普及も期を一にすることが理解できる。

今回の秩父の銘仙、小川の和紙などの江戸時代からの伝統は新しい発想を加えながら今に受け継がれている。しかし20世紀の科学革新はここ21世紀に入ってIT革命とドッキングしている。この伝統の物造りが行き続けるのは情報化によって世界に認めさせるのも一策かと思われるが。技術や産地がどのように生かされ残っていくか一生懸命模索している姿を沖縄や、展覧会や研究会で見聞する。伝統は今日に生かされてこそ受け継ぐ意味がある。その危機感の姿はどの分野でもいえそうであるが、相反する調和は最も難しく人に残された回答の仕事なのであろう。

夏期セミナーに参加して

相模女子大学 池田節子

第1回夏期セミナーが、埼玉県比企郡のヌエック(国立婦人教育会館)で平成12年8月7日(月)～9日(水)の3日間にわたって開催され、参加した。

池袋から東武東上線で70分の武蔵嵐山駅で下車。駅で偶然実行委員長の蔵方先生にお会いして、先生と周囲を散策しながら会館まで歩いた。会館は広大な敷地の中に宿泊棟、研修施設棟などが点在して建てられていた。

研修1日目は、午後から受付が始まり1時30分からセミナーが開始された。「世界の染織と日本の染織」の講演では、桜美林大学の渡辺くにあ先生より世界や日本各地の珍しい収集品が数百点会場いっぱい展示され、膨大は染織品をわかりやすく丁寧に分類して説明された。文献や書物でしか見られない裂を手に取りゆっくりと見ることができ、この分野で勉強している私にとって先生の意欲的な収集の姿勢に感動した。有意義な内容で自己研鑽におおいに役立てたいと思った。つづいて久保晴夫氏より地場産業の「小川和紙」について和紙製造の歴史、数少なくなった製造業者の後継

者問題、今後の手漉き和紙の需要のあり方など実感のこもったお話を伺い、手仕事の継続の難しさを感じた。2日目は午前中、シンポジウム「これからの服飾文化の研究」と題して諸先生方の熱いメッセージが会員におくられた。午後の講演「秩父銘仙のあゆみ」は、このセミナーで私がもっとも興味をいただいていたもので、秩父でただ一軒の織元となった逸見敏氏の地場産業への取り組みに力強さを感じた。沢山の反物や絹織物、紳士用のネクタイ、マフラー等を持参していただき、秩父銘仙の良さを実感した。3日目は朝9時30分に会館を出発して5ヶ所の見学先へ向かった。久保昌太郎手漉き和紙工房では、職場を見学し、和紙の手漉きを習ったが、改めて熟達した職人の手技の見事さに感動した。最後の見学場所となった丸木美術館へは、今にも夕立のきそうな中到着した。館内は木造で冷房もなく、丸木夫妻の「原爆の図」連作などが精力的に描かれていて、全ての作品に心うたれ熱いものがこみあがってきた。3日間のセミナーは充実した内容で企画した先生方にお礼申し上げます。

第1回研究例会



(旧 杉野芳子邸)

服飾文化学会の第1回研究例会が平成13年1月13日(土)に杉野女子大学において開催された。研究例会は学会員の研究成果の発表の場であるとともに、相互の親睦を目的としており、学会活動の主要な柱の一つとして位置付けられている。当日のスケジュールは、次の通りである。

14:30～15:30

講演「大学被服教育の今とこれから」

服飾文化学会 会長 石山 彰

15:30～16:30

見学会 杉野衣裳博物館

16:30~17:30

懇親会 杉野記念館 (旧 杉野亭)

さて、当日のメインは、石山彰先生の講演である。記念すべき第一回研究例会の研究発表を石山先生にお願いするのは、例会担当者のたつての希望だった。昨年末に先生はこの申し出を快諾していただき、今回の講演会が実現したのである。

講演内容は、先生の永年に亘る教育経験と服飾への眼差しを反映した示唆と含蓄に富むものだった。まず「現在の服飾が日常化し、社会的病理がなくなってきた」ことから説きおこし、それらが「常識化し、生活環境へ繰り込まれている」現状を指摘し、そのような状況下で服飾を考えるためには「別の空間や他の分野から見直してみる」必要性を強調された。また家政学の歴史を第一期と第二期に分けて、衣生活の近代化の問題について解説された。大学被服教育については「これからは、生活をひろく研究の対象をすべきであり、すでにアメリカでは1960年代に構成学の論文は途絶えている」事実を指摘された。「転換期であり、また、問題が見えなくなっているからこそ、大学で総合的に服飾を見る視野を獲得しなければならない」と結ばれた。

当初「50分位で切り上げます」とのことであっ

たが、先生の弁舌は冴えわたり、「これからの洋服はジャージ。あれは便利です」とユーモアも交え会場の爆笑を誘い、日ごろ謹厳な先生の別の一面も見せて下さった。第1回研究例会の冒頭を飾る有意義な講演会となった。

次いで杉野衣裳博物館の見学。ここは日本で初めての服飾博物館として1957年に開館したのだが「開館の時に来て以来です」との学会員がいらっしやっただけにはビックリ。青春時代を思い出されたことだろう。

さすがに専門家の集団。説明すべき学芸員が逆にレクチャーを受けるというほほえましい光景があちこちで見られた。

最後に懇親会は杉野記念館で行われた。ここは、杉野学園の創立者杉野繁一・芳子先生の旧宅で、昭和初期の洋館である。タイム・スリップしたかのようなセピア色の豪華な客間でワインやビールを楽しみながら懇談の時を持った。客間にある古いピアノから美しいバックミュージックが流れるはずであったが、調律がされておらず（多分戦後ずっと）ショパンが現代曲になってしまったのもご愛嬌だった。記念館の灯が消えたのが20時。

当日の参加者30余名。寒い中、皆様本当にありがとうございました。

(例会担当 塚田耕一)

***** 会員からのおたより *****

展覧会によせて

昭和女子大学教授 村井不二子先生が永年にわたって追求してこられた“西洋の女性美を訪ねて”ギリシャ時代から1936年までの服飾研究の成果を、同大学、光葉博物館展示室にて平成13年1月22日(月)~2月3日(土)まで開催、読売新聞に掲載され、多くの方々が見学に訪れた。展覧会によせてと題して次ぎのようなご説明があった。

昭和女子大学 村井不二子

西洋服飾史の進展と変容を見るためには衣服を正面からだけでなく、横から、後ろから立体的に把握することが望まれる。



西洋の服装は“形”(フォーム)の歴史である。それを実現するために時代によって身体と上着の間に色々な仕掛けをしてきた。その一つは、コルセット、フープ、パッドなどを使って身体の線を抑制又は誇張すること。もう一つは服の裏側に紐、

フック、孔、切り込みなどを設けて、引っ張ったり、結んだり、引っ掛けたりして立体的衣服を作ってきた。

このような特徴を学生に理解させる資料として、1/2サイズの服や下着を生活美学科(現生活環境学科) 服装史研究室の卒業製作として作ってみようと思いついたのが昭和45年であった。以来平成11年度まで30年継続し、47体の服とその下着類が107名の学生によって作られた。

展示作品は選ばれた人が作ったのではない。テーマに対する熱意と興味を持って、学友を協力して作り上げようとする心が集まったのである。

結果は必ずしも完璧とは言えない。ただそれぞれの時代の人々は、この衣裳の陰で何を考え、どんな生活を送ったのであろうかと考察しながら、人間の着てきた歴史を可能な限り再現してみたいと、助け合いつつ手を動かしてきた学生達の努力の跡をご覧頂きたい。

昨今の衣服は若い人を中心に据え、布地は軽く薄く、形は短く、小さくなる流れの中にある。しかし人間の美的意志はそれだけに止まるとは思わ

共立女子大学 伊藤紀之

ファッション・プレートは発行された時代の憧れの服飾を知る手がかりとして有効である。しかし、それは服飾資料としての価値だけに止まらず、その美しさにしばし心をうばわれる。魅力的なブ



れない。

歴史の中にある服飾の重厚長大なる美への回顧は、また新しい服飾を生み出す力となるのではないであろうか。

資料について

すべての西欧の博物館等に収蔵されているもの、又は文献資料に図示されているものから、採り、その出展を示した。

布地について

寸法が1/2であれば、模様も布地の厚さも1/2であるのが本来だが、これが一番困難な問題であった。本物のような高級布地は容易に入手できるものではなく、風合いや色合い、模様の似たものを使用した。

ボディについて

20世紀以前、女性のウエストの理想は40数cmとされた。そのためにコルセットでウエストを締めつけて服を着た。しかしボディ製作までは手が廻らず、ウエスト62cm(の1/2)の市販ボディを使用した為、美しいバランスは望み得ず、西欧社会におけるウエストの細さに対する執拗な追求は完成できなかった。

レートは部屋を飾るカレンダーにも利用される。このカレンダーは、二つの大戦の間に花を咲かせたドイツのアル・デコ期の服飾雑誌「STYL」の、1924年に発表されたファッション・プレートを使用している。ドイツの衣服産業は19世紀末には軌道にのり、デパートを中心に衣服の量販に成功した。20世紀初めのベルリンで、世界で初めて量産衣服のためのファッション・ショウが開かれたことでも知られている。



ドイツ・ファッションの背後には、リッパーハイデの服装図書の刊行、図書目録の作成、服装図書館の設立など、一連の服装研究の貢献が考えられる。また1920年代のバウハウスによるデザイン運動はよく知られているが、これまで語られるこ

との少なかつたドイツの服飾について、これらのプレートの魅力を通じて触れて見たい。

2001 CALENDER (KING CO.LTD)、資料所蔵
伊藤紀之

*****お知らせ*****

● 学会誌原稿

「服飾文化学会誌」創刊号は、諸事情に時間を要しましたが、5月初旬に完成します。次号からは、時期を早めて編集に着手しますので、ご投稿の準備をよろしくお願い致します。

(編集担当)

● 第2回論文発表会

第2回の論文発表会を、下記の通り開催します。

期日：平成13年3月3日(土)

場所：大妻女子大学 A棟155番教室

多くの発表をお寄せ下さい。また、皆さんのご参加をお願い致します。

● 平成13年度第2回総会・大会のお知らせ

服飾文化学会 第2回総会・大会を下記のように開催いたします。多数の研究発表を期待致します。

期日：平成13年5月18日(金)～20日(日)

会場：相模女子大学

〒228-8533 相模原市文京2-1-1

小田急線相模大野駅北口下車徒歩15分

内容：5月18日(金) 午後見学会(染色工場、神奈川県産業技術総合研究所)

5月19日(土) 午後研究発表(A、口頭発表 B、ポスター発表 C、作品展示発表)
総会

懇親会

5月20日(日) 午前研究発表(A、口頭発表)

● 平成13年度第2回夏期セミナー

服飾文化学会 第2回夏期セミナーを下記のように開催致します。地方の地場産業を訪れて見聞をひろめたり、また会員相互の交流を深める機会です。多くの方の参加を望みます。

期日：平成13年8月1日(水)～3日(金)

場所：福島県会津地方

内容：講演(地場産業関連を予定)

シンポジウム(修復・復元作業関連を予定)

見学会(会津塗、会津木綿、武家屋敷、齋藤清美術館など)

*****編集後記*****

今年の冬はことのほか厳しい寒さでしたが、本学会第1号の会報が皆様のお手元に届くころは春の日差しが感じられることと存じます。昨春の学会創立より論文発表会、総会・大会、夏期セミナー、研究例会と精力的に行事を行ってきましたが、これも会員皆様の熱心なご協力によるものと存じます。ここに1年間の活動を簡単ですが記録にまとめてみました。今後、会報が会員相互の情報交換の場として生かされるよう皆様より随時、服飾にかかわる内外の情報や研究活動、見聞録および学会に対するご意見などを事務局宛お寄せ下さい。

(事務局)

*****会費納入のお願い*****

平成13年度の服飾文化学会会費6,000円を5月中旬に同封の振込用紙にてお振込み下さい。過年度未納の方もよろしくお願い致します。会費に関するお問い合わせは下記にお願い致します。

〒102-8357 東京都千代田区三番町12

大妻女子大学 第三意匠学研究室 服飾文化学会事務局
TEL 03-5275-6029 FAX 03-3261-8119